

No.19 京都工芸研究会便覧

新年
謹賀

年頭の挨拶

京都工芸研究会会員の皆様

あけましておめでとございます。

平成から令和へと元号が変わり最初の新年を迎えることとなりました。西暦でいえば二〇二〇年の今年、国際的スポーツイベントである東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え活気ある一年となるでしょう。会員の皆様におかれましては幸多き年となりますよう心より祈念申し上げます。

さて、昨年二月と一二月に行ったトークセッション事業において、「京都の工芸のこれまでとこれから」というテーマで語り合う機会を持ちました。京都の工芸の姿がこの先どうなっていくのか、工芸の作り手がこの難しい時代にどう対応していくのか、また「京都らしさ」とは、といった話題にも展開し大いに盛り上がり充実した場になったと思います。

改めて、工芸とは、京都とは、日本とは、と考えてみますとなかなかかむつかしいものだと思います。七九四年遷都の平安京は長い歴史の中、工芸といわれる様々な伝統産業を生み出してきました。多くの栄枯盛衰があったことと思います。これまで歩んだ工芸の道程を、工芸と工業、工芸と産業、工芸とその時代の最新技術との融合といったことも併せて考えていくことで、この先の取り組みのヒントが見つかるかもしれない、そんな思いもしております。

今回のトークセッション、また産地見学会といった事業を通じ、会員間はもとより外部の方、一般の方々との貴重な意見交換をすることで、新たに見えてくる切り口があると思えます。こうした研究会事業に多くの皆様にご参加いただき、時代にあった京都の工芸を共に探求していく場になるように願っております。より一層充実した事業展開を進めていく一年としてまいります。

どうぞよろしくお申し込み申し上げます。

京都工芸研究会 委員長 大塚正洋

1. トークセッション「工芸な人々」vol.2 2019/12/4(月)

12月4日、京都工芸研究会主催の第二回トークセッション「工芸な人々」が開催されました。2月に行われた第一回の好評を受けての続編として、今回は「これまで」と「これから」というテーマで、材料・道具・売り方について深い工芸トークが繰り広げられました。

前半の「これまで編」は昭和20年代の五条通の写真を冒頭に、昔の陶器祭りの賑わいや生活習慣の変化などが話題となりました。とかく「昔は良かった」と語られがちな伝統工芸ですが、あらためて華の時代を駆け抜けたベテラン勢が語る体験は生き活きとしていました。しかしながら、技術は昔より進歩している一方で、現在では再現が難しくなってしまった手技も多く、このままでは工芸が「オーパーツ化」(*)する未来も示唆されました。

後半の「これから編」では次代を担う若手を中心に、伝統工芸の未来への提言をフリップで発表いただき、「これから」を生き残り、発展するための様々な意見が交わされました。とくに京都を「テーマパーク」ととらえ、作り手が「俳優」となってお客様の期待に応えるという斬新なアイデアは広く共感を呼びました。

質疑応答も活発に交わされ、「おいでやす三寸」など業界ならではの符牒(詳細はP.4の「つぶやいていいですか」参照)や、仕事の依頼をゲットする秘訣は?との質問に「降ってきた出会いは逃さないよう、握り潰さないように、そっと受け取るのです」と哲学的なご回答で感嘆の声があがるなど、実りあるひとときを感じていただけたと思います。

3月頃には「人材」に焦点を当てた第三回も開催予定です。師匠になること、弟子になることなどについて熱く語り合います! 会員の皆様のご来場を心よりお待ちしております。



五条通りの写真を元に当時を語る陶泉窯 谷口氏。



若手から伝統工芸の未来についての提言。

(*)オーパーツは、「out-of-place artifacts」の略。それが発見された場所と時代が全くそぐわず、なぜ存在するのか謎とされている物の総称)

2. 福井県鯖江市産地見学会 レポート 2019/11/25(月)

異業種工芸の集積産地として知られる福井県鯖江市を訪問しました。鯖江の地場産業振興に活躍されている合同会社TSUGIのデザインディレクター・新山直広氏には、デザイン・ものづくり・地域といった領域を横断しながら、地域や地場産業のブランディングを手がけるそのお仕事についてご講演いただきました。併せて鯖江の地域技術を継承しながら、それぞれオリジナルブランドを展開している漆琳堂と谷口眼鏡を見学しました。

■TOURISTORE(ツーリストア)の見学

新山直広氏の案内で合同会社TSUGIが経営する「TOURISTORE(ツーリストア)」を見学しました。ショップ(SAVA!STORE)・漆器工房(錦古里漆器店)・観光案内所・デザイン事務所・レンタサイクルとを併設し、複合的な施設となっています。まずはここにすれば、鯖江のものづくりやデザインに触れることができます。



上：TOURISTORE 外観
左：ショップ「SAVA!STORE」。鯖江の新しい土産品が販売されている
中：漆塗りレンタサイクル。かつていいけれど、塗りが良すぎてレンタルする人はなかなかいないのが残念、とのこと。
右：錦古里漆器店。作業場が見学できる。

■新山直広氏(合同会社TSUGI代表)講演の概要

・鯖江との出会いからTSUGIの設立まで

福井県で唯一人口が増えているという鯖江には約100人ほどの移住者がいて、その第1号だという新山氏。吹田市出身で、京都精華大で建築を学ばれました。鯖江との縁は、「河和田アートキャンプ」(*1)に参加したことがきっかけ。2009年に鯖江に移住。大学を出て社会へ出た時にリーマンショックが起これ、それを機に「建物をたてる」よりもっと大切なこととして、地域おこしやコミュニティデザインの重要性を考えていたそうです。



新山直広氏

その頃、新山氏が市内の漆器産業について調査してわかったことは、不況で業界がネガティブになっていること、越前漆器の知名度がほとんどないことでした。一方、伝統工芸品販売で成功している事例から見えてきたのは、工芸の技術ではなく「見せ方」そして「デザイン」と「ブランディング」に力を入れていることだったそうです。

市役所の職員として活動する一方で新山氏は「TSUGI」を結成します。はじめはサークル活動で、兵庫県小野市で地域おこしをしている「シーラカンス食堂」の小林新也氏を招いて講演会を開き、ブランディングについて学んだりして、積極的に他の産地とつながる努力を続けました。鯖江では移住者が少しずつ増えるものの、その若者の将来はどうなる？ そんなことを考え、ついに市役所を退職し合同会社「TSUGI」設立するに至ったそうです。

・TSUGIの実践

新山さんによれば、「TSUGI」で実践しているのは「支える・作る・売る・醸す」の4点。まず、グラフィック、web、ロゴマーク、パッケージなどのデザインを手がけることで、産地企業をデザインとブランディングの面から「支える」。そして、「作る」ことについては、「自社ブランド」を立ち上げ、カラフルな漆塗りのアクセサリーなどを事業者に委託して製作、年間の売り上げにも成果が出ているそうです。さらに、



カラフルなアクセサリー（眼鏡フレームの端材などを活用している。SAVA!STOREにて）

(*1)「河和田アートキャンプ」:県内外の学生達を、河和田地区(うるしの里)に受け入れ、学生のもつ知性・感性・創造性を有効活用しながら、河和田地区内の豊かな地域資源である地場産業や自然環境を活用したアートの事業を展開することで、河和田地区の活性化を図ることを目的とした取り組み(鯖江市ホームページより)。

「売る」ことにもこだわっておられます。鯖江は地域の品物を全国に売り歩く「行商」の歴史があり、その現代版をパルコ、ルミネなど、若者向けのファッションビルを選んで売り込み、イベント販売をするなど、独自の「売り場」確保の取り組みとして実践されています。一方、こうした実店舗で売る方法の他、オンラインショップも重視しているそうです。当初はネットで伝統工芸を売ることには抵抗があったものの、オンラインショップは画像や動画、商品の開発ストーリーなど必要な説明や資料を効果的に載せることができ、じっくり見ていただけるので、実は伝統工芸を売ることにおいても高い販売力があることがわかったそうです。

・RENEWについて

そして、「TSUGI」が中心となり2019年で5回目の開催となるRENEW(*2)は、「わざわざ来なくなる産地」を目指した産業観光イベントです。都会で開催される大規模な見本市より、「百聞は一見に如かず」で産地に来てもらい工房見学、ワークショップ、販売などを展開し来場者に楽しんでもらいファンになってもらう。それにより、好循環を「醸す」ことが出来てきたと言います。

RENEWは行政の助成金に頼らないことを大切にしており、参加企業からの2万円の参加費での実行委員会で運営しています。来場者も年々増え、利益も出るようになり、実績が出てきたため参加事業者は当初20社程度から今年110社までになりました。なにより地元の熟練職人は訪れる若者らとの出会いを喜んでいるとのこと。

RENEWの5カ条は「一、当事者意識をもち、熱量をもって行動すること」、「二、ビジョンをもち、常にまなび、考え続けること」、「三、ものづくりの魅力を伝え、産地のファンを増やすこと」、「四、こどもや若者、職人など、お互いがお互いの考えを思いやること」、「五、次世代が働きたいと思える、持続可能な社会を実現すること」です。これらを大切に「熱量」をもって日々取り組んでおられます。

■株式会社漆琳堂

創業寛政5年(1793年)と歴史が古く家業としては業務用漆器製造を手がけてきた漆琳堂。10年ほど前からBtoCのオリジナルブランドを立ち上げ、カラフルなお椀や箱類、アクセサリなどを商品展開しています。店内はいわゆる漆器店のイメージと異なり、明るくおしゃれな展示ギャラリーといった感じ。来客をおもてなしするダイニングのような交流スペースがあり、漆器が日常生活で使われるイメージが湧くように工夫されたディスプレイです。

体験教室や金継ぎ、修理依頼にも対応され、顧客との交流に力を入れておられます。現在、京都で漆芸を学んだ若手の職人2名が働いていて、漆琳堂の漆器が好きで入社した職人もいます。社長の内田徹氏は、「RENEWへの参加は、実績が積み重なってそれが成功体験となった。行政や助成金に頼らず、自らできることを考えながら出店し続けることが大事。」とのことでした。

■有限会社谷口眼鏡

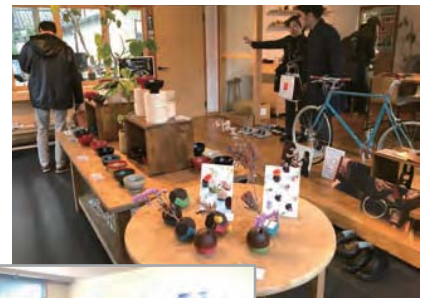
谷口眼鏡は、プラスチックフレームの眼鏡を主に製造しておられます。以前はOEM事業が主体であったが、20年ほど前に中国に眼鏡作りの技術が流れた頃からオリジナルブランドを始めたとのこと。自社オリジナルブランド「TURNING(ターニング)」を立ち上げていますが、そのデザインはトレンドよりも「掛け易さ、使い心地」を追求する視点を大切に、定番かつ質の高い製品開発を行っているとのこと。

代表取締役の谷口康彦氏は、RENEWの実行委員長を務めて

(P.4に続く)



RENEW (https://renew-fukui.com/)



漆琳堂のショールーム



作業場にて修理のお椀の説明を聞く



谷口眼鏡にて、谷口社長より眼鏡製作の工程のお話をうかがう



眼鏡フレームの研磨の様子

(*2)RENEW(リニュー):福井県鯖江市・越前市・越前町で開催される、持続可能な地域づくりを目指した工房見学イベント(RENEW(リニュー)ホーム ページより)。

(「福井県鯖江市産地見学会レポート」 P.3からの続き)

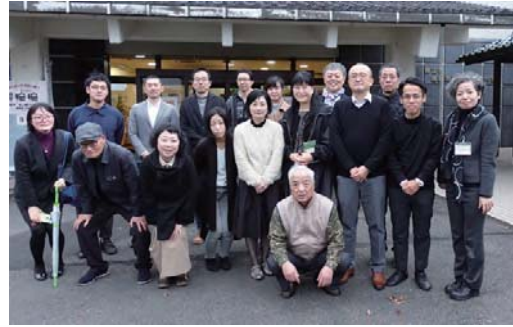
おられます。RENEWは、「唯のオープンファクトリーではなく持続可能な経済活動地域を目指している。」とのこと。仕事が無ければ10年後のものづくりは無い。経済活動を立て直すことが産地振興の第一であり、今それらの取組により、産地に第1のヒーロー(成功企業)、第2のヒーローが生まれてきている、とのことでした。

【事務局より】

新山氏は、産業振興では時代の変化をとらえ、自分事として考え、行動できる人を育てることが重要で、それには「熱量がすべて」とおっしゃいます。

昨年の産地見学会でお話を伺った小林新也氏もプロジェクトに関わる人々が自分事として動くことの重要性を指摘されておられました。皆が自分事として考えるためには、その事業のビジョンが皆が共有できる明確なものでなければならないと思います。業種間、世代間の違いを超えて調整していく難しさは京都も他の地域でも同じ課題だとあらためて感じました。そして、新山氏の活動は「支える・作る・売る・醸す」というものづくりの循環の構築であり、それを通して地域コミュニティに幸せと豊かさをもたらしている、まさにコミュニティデザインが重要とおっしゃった言葉通りの取組だと思います。

参加の皆様からは「新山氏の講演の中で生産から流通まで特にデザインの重要性についての話が印象に残った。」「見学することで参加者各々が自分の仕事の中で取り組むべきヒントが見つかるかと思いますが、更には京都が産地として取り組むべきことのヒントも見つかるのではないかと思います。」など、ご感想をいただいております。長旅となりましたが、ご参加ありがとうございました。



うるしの里会館(越前漆器伝統産業会館)の前で記念撮影。この後、バスにて産技研帰着。お疲れ様でした。

3. 第4回「デジタル3D技術活用講習会」 2019/12/17(火),18(水)

産技研主催(デザインチーム担当)の3DCADソフトを活用したモデリングやデザイン検討、解析(強度解析や熱解析)の講習会。工芸研究会として共催しました。2年前から開催しており、今回で4回目となります。

これまでと同様に、伝統工芸分野と工業分野で開催。工業分野では「器」を課題としてモデリングやレンダリング、熱解析の実習を行いました。デジタル3D技術は近年低価格化や簡便化が進み、工芸のものづくりの現場でも徐々に活用が図られており、本講習会への応募も増えてきています。基本的な操作方法から3Dプリンタなどの活用手法をご紹介します。皆様の新しい取組のきっかけになればと考えています。本講習会は来年度も実施を予定しています。

■今年度内では、産技研主催で以下の技術講習会を予定しています。
第1回デジタル2D技術活用講習会
「フリーで使える!グラフィックソフト初心者講習」
期日:3/10(火) 締切:2/21(金) 講師:デザインチーム



上:講習会の様子。「器」に対しマッピングを実施。
右下:工業部品の加工設定。
左下:光硬化性樹脂3Dプリンタ Form2

事務局より

- 2020年1-3月の主な予定
- 1/16(木)18:00~20:00 竹編組勉強会(9)
 - 1/27(月)10:30~12:00 第3回委員会
 - 2/20(木)18:00~20:00 竹編組勉強会(10)
 - 3/5(木)~8(日) 伝統産業技術後継者育成研修漆工コース修了作品展
 - 3月上旬 トークセッション「工芸な人々」vol.3
 - 3/10(火)10:00~16:00 デジタル2D技術活用講習会
 - 3/19(木)18:00~20:00 竹編組勉強会(11)
 - 3月下旬 第4回委員会
 - *1~3月中 随時 事業企画チームミーティング

つぶやいていいですか。

2020年、あけましておめでとうございます。「おいでやす三寸」は古い西陣地域の符牒(業界言葉)。西陣織を織っている途中の職人が急な来客に「おいでやす」と対応し世間話などして手を止めてしまったために3寸分織り損ねてしまったという様子を表しています。せっかく訪ねたのに「あの人、おいでやす三寸やな」と言われると京都のイケズかぶぶ漬けかと思っちゃいますが、出来高払いの仕事で少しでも機を織り進めたいと思う職人の気持ちと暮らしぶりがにじみ出ている言葉だなと思います。(ひ)